問題と目的
現在、発達障害者の現場では、高機能性発達障害（High Functioning Pervasive Developmental Disorders以下HFPDD）の子供の存在が広く認識されている。その中で特に懸念されているのは、診断の遅れがその後の適切な発達支援を困難にしてしまう可能性や、二次的障害を抱えてしまうことが指摘されている。
近年では、PDDの社会性の問題に焦点をあてている研究が多い。本研究所では、HFPDD児の社会性の問題を検討するためにあたり若本・吉田（2011）のPDD児者の社会情動プロセスに注目する枠組みに準拠する。
若本・吉田（2011）は、昨今のPDDに関する先行研究の観察結果をPDD児者の社会性の問題が生まれるプロセスを推測している。情動情動プロセス自体、他者の情動を情動するプロセスを目指す。続く、社会的相互作用およびその場合における情動の把握、その判断などの過程である。診断基準等で症状・問題行動とされる、他者の情動や意図がわからない、剣の空気が読めない、自分の心を隠して行動するなど、様々なプロセスの根拠には、上述した情動情動プロセスが存在する。PDD特有の情動研情動認知プロセスが存在し、PDD特有の社会的、情動的認知プロセスの基盤であることが示されている。
そこで、本研究所では、思春期のHFPDD児における社会性の問題を社会情動プロセスという観点から検討するにあたり、他者の社会的相互作用の場面を図式化しているP-Fスタディを用いて、社会情動プロセスごとに追加質問を行うことにより、HFPDD児の社会情動プロセスの特徴を明かにする。その後、PDD児に対して実施したP-Fスタディでは、仮想内容だけ見ると、仮想内容は、文章表現としておかしくないが、仮想が著者の発した言葉に対する応答として、ふさわしくない場合や、場面の無理解、あいまいな表現の為、複数にスコアが考えられる場合などである（木田、2007、2010）。仮想がその場に合ったスコアが多く見られた（木田、2007；石坂ら、1997；又吉・村山・山田、2002；田辺・田村、1999）との指摘を踏まえ、Uスコアに注目して検討を進めることとする。
方法
研究協力者　HFPDDの診断を受けている中学生3名。
研究期間　2011年11月～12月
実施場所　本大学院心理臨床相談センター施設内
使用した道具1）研究協力者の生活年齢に合わせて、P-Fスタディの青年版を選択した。
2）表情カード。情動情動プロセスの追加質問に用いるもので、怒り（し悪申しとする、苦織する、怒りを含む13段階）、笑顔・悲しみ・不安・恐怖・意地悪な表情の描かれた9枚のカードを用いた。
追加質問　情動情動プロセスに対する質問をして、文脈に応じた表情認知ができているか、選んだ表情はどういった意味で用いられたかを確認した。社会的、情動的認知プロセスでは、絵と文章から、どの様に場面を読み取ったか、両者の内面的反応を、どの様に認知するかは想定したのかを確認した。分析の手順としては、1）実施したP-Fスタディ反応を、標準法のスコアにUスコアを加えて、スコアリングと分析を行い、2）24場面すべての回答に対して、4つの追加質問を行った。3）追加質問に答える回答を整理していく中で、Uスコアが社会情動プロセスにおけるどこで現われるのか、またそれぞれのUスコアにはどのような特徴があるのかを、PDDの障害特性と関連付けながら考察した。
結果と考察
1. HFPDD児のP-Fスタディ
A. P-Fスタディ結果　場面2の「で、いくらかなの？」という回答からは、花瓶を大切にしている人の気持ちを置き去りにし、物を返す事で解決しようとしているから、対人相互作用場面において、他者の気持ちを考えらず、自分がした事への対処が行うが、自己に非があるとは考えていないことが想像される。また、追加質問後は、他者のE-Aの高さが目立ち、子供はE-Aが高かったと感じる。反応がその場に合ったUスコアが顕著に見られた（木田、2007；石坂ら、1997；又吉・村山・山田、2002；田辺・田村、1999）との指摘を踏まえ、Uスコアに注目して検討を進めることとする。
B. 方法
研究協力者　HFPDDの診断を受けている中学生3名。
研究期間　2011年11月～12月
実施場所　本大学院心理臨床相談センター施設内
使用した道具1）研究協力者の生活年齢に合わせて、P-Fスタディの青年版を選択した。
2）表情カード。情動情動プロセスの追加質問に用いるもので、怒り（し悪申しとする、苦織する、怒りを含む13段階）、笑顔・悲しみ・不安・恐怖・意地悪な表情の描かれた9枚のカードを用いた。
追加質問　情動情動プロセスに対する質問をして、文脈に応じた表情認知ができているか、選んだ表情はどういった意味で用いられたかを確認した。社会的、情動的認知プロセスでは、絵と文章から、どの様に場面を読み取ったか、両者の内面的反応を、どの様に認知するかは想定したのかを確認した。分析の手順としては、1）実施したP-Fスタディ反応を、標準法のスコアにUスコアを加えて、スコアリングと分析を行い、2）24場面すべての回答に対して、4つの追加質問を行った。3）追加質問に答える回答を整理していく中で、Uスコアが社会情動プロセスにおけるどこで現われるのか、またそれぞれのUスコアにはどのような特徴があるのかを、PDDの障害特性と関連付けながら考察した。
結果と考察
1. HFPDD児のP-Fスタディ
A. P-Fスタディ結果　場面2の「で、いくらかなの？」という回答からは、花瓶を大切にしている人の気持ちを置き去りにし、物を返す事で解決しようとしているから、対人相互作用場面において、他者の気持ちを考えらず、自分がした事への対処が行うが、自己に非があるとは考えていないことが想像される。また、追加質問後は、他者のE-Aの高さが目立ち、子供はE-Aが高かったと感じる。反応がその場に合ったUスコアが顕著に見られた（木田、2007；石坂ら、1997；又吉・村山・山田、2002；田辺・田村、1999）との指摘を踏まえ、Uスコアに注目して検討を進めることとする。
B. 方法
研究協力者　HFPDDの診断を受けている中学生3名。
研究期間　2011年11月～12月
実施場所　本大学院心理臨床相談センター施設内
使用した道具1）研究協力者の生活年齢に合わせて、P-Fスタディの青年版を選択した。
2）表情カード。情動情動プロセスの追加質問に用いるもので、怒り（し悪申しとする、苦織する、怒りを含む13段階）、笑顔・悲しみ・不安・恐怖・意地悪な表情の描かれた9枚のカードを用いた。
追加質問　情動情動プロセスに対する質問をして、文脈に応じた表情認知ができているか、選んだ表情はどういった意味で用いられたかを確認した。社会的、情動的認知プロセスでは、絵と文章から、どの様に場面を読み取ったか、両者の内面的反応を、どの様に認知するかは想定したのかを確認した。分析の手順としては、1）実施したP-Fスタディ反応を、標準法のスコアにUスコアを加えて、スコアリングと分析を行い、2）24場面すべての回答に対して、4つの追加質問を行った。3）追加質問に答える回答を整理していく中で、Uスコアが社会情動プロセスにおけるどこで現われるのか、またそれぞれのUスコアにはどのような特徴があるのかを、PDDの障害特性と関連付けながら考察した。
結果と考察
1. HFPDD児のP-Fスタディ
A. P-Fスタディ結果　場面2の「で、いくらかなの？」という回答からは、花瓶を大切にしている人の気持ちを置き去りにし、物を返す事で解決しようとしているから、対人相互作用場面において、他者の気持ちを考えらず、自分がした事への対処が行うが、自己に非があるとは考えていないことが想像される。また、追加質問後は、他者のE-Aの高さが目立ち、子供はE-Aが高かったと感じる。反応がその場に合ったUスコアが顕著に見られた（木田、2007；石坂ら、1997；又吉・村山・山田、2002；田辺・田村、1999）との指摘を踏まえ、Uスコアに注目して検討を進めることとする。
B. 方法
研究協力者　HFPDDの診断を受けている中学生3名。
研究期間　2011年11月～12月
実施場所　本大学院心理臨床相談センター施設内
使用した道具1）研究協力者の生活年齢に合わせて、P-Fスタディの青年版を選択した。
2）表情カード。情動情動プロセスの追加質問に用いるもので、怒り（し悪申しとする、苦織する、怒りを含む13段階）、笑顔・悲しみ・不安・恐怖・意地悪な表情の描かれた9枚のカードを用いた。
追加質問　情動情動プロセスに対する質問をして、文脈に応じた表情認知ができているか、選んだ表情はどういった意味で用いられたかを確認した。社会的、情動的認知プロセスでは、絵と文章から、どの様に場面を読み取ったか、両者の内面的反応を、どの様に認知するかは想定したのかを確認した。分析の手順としては、1）実施したP-Fスタディ反応を、標準法のスコアにUスコアを加えて、スコアリングと分析を行い、2）24場面すべての回答に対して、4つの追加質問を行った。3）追加質問に答える回答を整理していく中で、Uスコアが社会情動プロセスにおけるどこで現われるのか、またそれぞれのUスコアにはどのような特徴があるのかを、PDDの障害特性と関連付けながら考察した。
追加質問前は、自身の評価が下がることを恐れ、事は荒立っていかず、相手に対して攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

BOP-Fスタディ結果 追加質問前では、他者に対する攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

20F-Fスタディ結果 追加質問前では、他者に対する攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

BOP-Fスタディ結果 追加質問前では、他者に対する攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

COP-Fスタディ結果 追加質問前では、他者に対する攻撃的な気持ちが存在することがわかった。

２．HFDD児の社会情動プロセス

Aの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

Uスコアは、追加質問前は14面で認められたが、追加質問後は、11面で減少した。自分の経験をもとにし、場面の理解や、他者の内面の反応を想像することがない。さらに、場面や他者の内面の反応を理解することが難しいと考えられる。

また、場面9では、左の人物の気持ちを「文句言われたら大け」と強気であったが、表情は恐怖を反映しているから、表情と内面の反応が一致していなかった。このことから、表情から、他者の気持ちを理解することが難しい。他者が意図していることが読めないで、自分の表情も、感情が生じていない無表情を選ぶ事が多かった。

Bの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

場面14では、「すっかり忘れてました」と報告しており、追加質問後では、「忘れてしまった」「10分前なのに忘れてた」と報告している。このことから、Bがスタディに示された場面から、文脈読み取れず、B独自の解釈により場面が設定されていた。さらに、読み取れていない場面の中から、第三者の存在を認識できていないことが考えられた。さらに、社会情動知覚プロセスでは、フラストレーションをおこしている右の人物において無表情カードを多く選択していた（場面4、15、20）。無表情に対する意味付けは「普通になっている」と回答していることから、他者の気持ちを考え、許容したり、受容したりするのではなく、義務のうながりで許容していると考えられるところから、他者の気持ちを表情から読み取れていないと考えられる。また、場面4、7、15、20、21では、反応内容だけ見ると、その場にあった回答が得られていたが、追加質問する事で、理解できずに適切に見える回答を出していたことが明らかになった。

Cの社会情動プロセスの追加質問に対する回答

場面14では、追加質問前は「すいません」と回答していた。追加質問をすることで、Cが自分自身に気づき、より深い場面を理解することができた。このことから、第三者的存在が理解でき、C独自の解釈が、場面が設定されていた。社会情動知覚プロセスでは、フラストレーションを起こしている右の人物の表情に対し、恐怖や不安、怒り全くといった感情を選択することもあった。場面21において、「左の人の前で怒ると、左の人が少し怒るから怒られない、本当は、怒っている」と回答した。不快や怒りを感じていないなら、他者の評価が気になり、表現出来ない為、自己の感情と表現された感情が異なっていた。

総合考察

3人共通して見られた事　先行研究の指摘通り、3人全てにおいてUスコアが見られた。また、場面14において、第三者的存在を理解できず、それぞれの経験をもとに、独自の解釈により、場面が設定されていた。BとCに関しては、その場にあった回答が見られなかったと思われたが、追加質問することにより、場面理解ができていなかったが、一見適切に見える回答をしていたことが明らかとなった。

巻上に示した様に、P-Fスタディを用いて、社会情動プロセスの検討を行った結果、どの様なプロセスをとり、HFDD児の問題が表現されているのかが明らかにされた。さらに、P-Fスタディを用いたことで、日常のどの様な場面で、HFDD児の社会性の問題が現れやすいのかに対する示唆が得られた。その為、心理的支援を受けにくい状態にあったHFDD児に対し、個人に合った、より適切な支援を受けられることを繋がると考えられる。